

早稲田大学学位審査論文
博士（人間科学）
概要書

社交不安に対する役割固定法の効果に関わる
要因の影響と改良型役割固定法の効果

Influence of Each Factor Related to Effectiveness of
Fixed-Role Therapy for Social Anxiety and Effects of
Refined Fixed-Role Therapy

2013年7月

早稲田大学 人間科学研究科

阿部 ひと美
ABE, Hitomi

研究指導教員： 根建 金男 教授

本論文は、構成主義的な理論であるパーソナル・コンストラクト理論 (personal construct theory: PCT; Kelly, 1955) に基づくアセスメント法であるレパートリー・テスト (repertory test: Rep) と介入技法である役割固定法 (fixed-role therapy: FRT) を取り上げ、それらを用いて社交不安を理解すること、およびその理解に基づき、社交不安に対する効果的なアプローチ方法を探ることを目的としたものである。

本論文は、9章から構成されている。冒頭の第1章から第4章においては、社交不安の概念、および社交不安の理解とそのアプローチ法に関する先行研究を概観し、それを踏まえて、本論文における問題意識の提起と目的の提示を行った。第1章では、社交不安の概念についてまとめた。社交不安に関する先行研究を概観し、社交不安の定義と特徴、社交不安に関連する概念、および社交不安の発生と維持のメカニズムについて説明した。第2章では、社交不安の理解とそれへのアプローチを取り上げた。まずは、これまでに多くの研究が行われ、エビデンスが蓄積されている認知行動療法の分野における、主要な社交不安のアセスメント法とアプローチ法を解説した。次に、本論文で取り上げるPCTの分野における、主要な社交不安のアセスメント法とアプローチ法を解説した。

第3章では、第2章で取り上げたPCTにおけるアセスメント法とアプローチ法に関する研究の問題点を挙げた。具体的には、文脈を考慮に入れた対人要因との社会的相互作用を把握できるRepの開発が必要であること、FRTの有効性を示すために、対人関係において役割を演じることが社交不安にどのような影響を与えるのかという点を明らかにする必要があること、社交不安に対するFRTの効果をより高めるために、FRTの3段階の主要な手続き (演技シナリオの作成, リハーサル, 上演法) のそれぞれにおいて、PCTの基本的人間観である「人の主体的な、環境の認識と環境への関わり」をより具現化したFRTを開発し、それが社交不安に及ぼす影響を検討する必要があることという3点を指摘した。第4章では、第3章で指摘した問題点を踏まえ、本論文の目的を提示した。本論文の目的は、社交不安用のRepを作成し、それを用いて、社交不安が高い者における特徴を理解すること、対人関係において役割を演じることが社交不安に及ぼす影響について、数量的に検討すること、効果を強める要因となると推測される変数を操作することで、FRTの効果が変化するかどうかを実験的に検証すること、さらに、効果を強める要因を踏まえて改良したFRTの社交不安に対する効果を詳細に検討することであった。

第5章では、社交不安用Repを開発し、それを用いて社交不安が高い者におけるパーソナル・コンストラクトの特徴を理解した。研究1においては、社交不安を標的としたパーソナル・コンストラクトを把握するための社交不安用Repが開発され、研究2では、それをさらに精緻化した、社交不安用Rep発展版が開発された。そして、社交不安用Repあるいは社交不安用Rep発展版によって得られた反応を検討することで、社交不安が高い者におけるパーソナル・コンストラクトの特徴が示された。

第6章では、FRTの基礎研究として、役割を演じることが社交不安に及ぼす影響について検討した。研究3の共分散構造分析の結果から、対人関係の中で役割を演じることやそれに対する主観的な評価は、社交不安を扱ううえで重要な変数であることが示唆された。したがって、役

割を演じることを特徴とする FRT を社交不安に適用することは、有意義であると考えられた。さらに、FRT の効果を強める要因について検討する際には、「人の主体的な、環境の認識と環境への関わり」をより高めるという視点に加えて、「役割演技を行う自己に対する否定的な評価」をさせないという視点を考慮する重要性が示された。

第 7 章では、FRT の効果を強める要因として考えられる変数、すなわち、PCT の理念に沿った「人の主体的な、環境の認識と環境への関わり」をより高め、「役割演技を行う自己に対する否定的な評価」を阻止すると考えられる変数を取り上げ、それらが社交不安に対する FRT の効果に及ぼす影響について検討した。研究 4 では、従来の FRT では、自分が演じる役割の決定に関して、クライアントの意思決定が十分反映されていないことが考えられるため、「演技シナリオの作成」段階において、演じる役割を決定する際に個人の意思決定を反映させた FRT を開発し、その社交不安改善効果を検討した。研究 5 では、「リハーサル」段階での取り組みを通して、クライアントが、自分が演じる役割について把握していること、および役割を演じるという課題を行う意味を理解していることが、社交不安に対する FRT の効果にどのような影響を及ぼすのか検討した。研究 6 では、「上演法」段階において実行される役割演技が、シナリオに沿った適切なものであるかどうかを実験参加者自身に把握してもらうために、自己の思考や行動を客観的に観察し、把握する視点を促進する手続きを取り入れた FRT を開発し、その社交不安改善効果を検討した。その結果、FRT の手続きに、「シナリオ作成に意思決定を反映すること」「役割や課題の意味理解を促進すること」「役割を演じる自己の思考や行動を客観的に把握すること」を取り入れることが、クライアントにおける「人の主体的な、環境の認識と環境への関わり」を高めるとともに、「役割演技を行う自己に対する否定的な評価」を抑制し、社交不安の改善に優れた影響を及ぼすことが示された。

第 8 章研究 7 では、研究 4~6 の成果を踏まえ、効果を強める要因に着目して改良した FRT を考案し、その効果を検証した。その結果、演技シナリオの作成、リハーサル、上演法の各段階において、効果を強める要因に基づく改良を行った FRT は、社交不安の改善に有効であることが示された。さらに言語報告の内容から、モチベーションや FRT への抵抗感、負担感などの観点からも、効果を強める要因に基づく改良を行った FRT の有効性が示唆された。

第 9 章では、総括的考察を行った。まず、本論文の研究 1 から研究 7 によって得られた成果について概括した。次に、研究成果を踏まえて本論文の意義について考察した。最後に、本論文の限界と今後の課題について言及し、本論文を終了した。